只見短歌会　二月詠草

大塚栄一　指導

救急の支度一通り枕辺に揃へておくも一人居なれば　馬場　八智

草餅を搗く度我は思ひ出す祖母の一言胸あつくして　関谷登美子

図書券の当たりし老い母尚更に折り込みのクイズ楽しみに待つ　新国由紀子

久々の再会なれば忽ちに同郷人に戻る嬉しさ　目黒　富子

伝統の火の用心の書き初めを配り来る子ら年ごと減りぬ　渡部ゆき子

かつてなき雪の少なき雪まつり縮小さるるも人出の多し　渡部ヨリ子

歌詠むは苦しみあれど楽しみも多しと悩む娘に伝ふ　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　三月定例会

目黒十一　指導

月と我へだてるものなし春の闇　一恵

息上げてとどまりて聞く初音かな　信

一月の水田一月の空の色　礼

水底に形くずして冬の月　礼

湯の宿の枝折れ桜満開に　一穂

鉋屑匂を飛ばす春の雪　一穂

冬木の芽赤子授かり動くとや　修一

春を待つ授乳の娘ママとなり　修一

マスクの可否揺れる巷に踏み入れる　幸生

猿食みし芽屑あれこれ雪渡り　幸生

いっときの女郎のごとし桜かな　信

秩父路に春を探して一人旅　信

春光や仏間いっぱい喪開ける　都

暖かやあめ色になる煮豆かな　都

春寒や遠巻きに見る救急車　味代子

夜もすがら風吹きちぎる春嵐　味代子

春の雨囲い解かれし南天に　弘子

蕗味噌を小さき真白な皿に盛り　弘子